Graham Greene 研究

The End of the Party 論

宮　野　祥　子

I

この物語は主人公が或る事件を経験することによって，内的変化をとげ，それまでの状態を脱出し変身していく物語ではなく，最後に事件が生じ，それによってそれまでの物語の意味が明らかになるという構成の明確な物語である。つまり Surprise Ending[(1)] をうまく利用した啓示の瞬間[(2)] をもつ物語であると思われる。Francis Morton の死という事件の役割をこのように理解することができるのではないかと考えられる。死は結果としてそこに在るのではなく，死によって逆にそこに到るまでの生が明らかにされていくようなものだと思われるのである。同時に Peter Morton にとって Francis の死は不可解なままで終っているという意味において，彼の内的変化は明確ではなく，開眼の物語[(3)] とはなっていないのである。このことは Peter Morton もまた物語の全体としての意味を明らかにするための役割をはたしていることを示しているのではないかと思われる。

従ってまず問題になるのは Surprise Ending である Francis の死が Francis を如何なる存在たらしめているかということである。それによって他の登場人物達との関係，次いで Peter との関係が明らかになってくると思われるのである。尚テキストは *Twenty-One Stories*, Heinemann, 1965を使用している。

II

9 才の少年である Francis はまず死を識る存在として設定されている[(4)]。この短編をつらぬいている彼の恐怖は実はその奥に死を内包するものとして設定されているの

であり，徐々に時が死の瞬間へと流れていくことの恐怖であるということができると思われる。まず Francis の死の意識は朝目覚める前にみる夢として描かれている。

I dreamed that I was dead.

この<僕が死んだ夢をみた>ということばは死ということばを知り，しかもそれを自分に関することがらとして知っていることを表わしている。それは自分の生に終りがあることを知ることであり，同時に自分の生を他ならぬ自分の生として自覚することによって他者とは区別された自分というものを意識していることの表れであると考えられる。9才の少年をこのように描出した作者の意図は後に考えることにして，Francis があれほど避けたいと切望したパーティでの隠れん坊遊びの折りの暗闇に対する恐怖とはどのようなものであるかを考えてみたい。しぶしぶパーティに出かけたFrancis がいよいよ隠れん坊が避けられないことを知って，最後の勇気を出して，なんとかして逃れたいと Mrs. Henne-Falcon にうったえるとき，その彼の恐怖の有様は双生児の兄 Peter に意識されるのであるが次のように描かれている。

> the fear of bright lights going out, leaving him alone in an island of dark surrounded by the gentle lapping of strange footsteps.

ここに描かれているのは波の音にとりかこまれた暗黒の孤島にただひとりとり残されて，波がぴたぴた打ち寄せるような聞きなれぬ足音に耳をすまさねばならないような救いのない淋しさである。自分を庇い支え理解してくれる者の全くない暗闇の中での孤立である。しかもどこからか得体の知れない足音がひたひたと永遠に押寄せる波のように永久に自分をとりまいて押寄せて来ているのに逃れられないという絶望的状況である。

この *The End of the Party* と同年に書かれた作品に同じく短篇 *The Second Death* がある。この物語も Francis の場合に類似しており，死を夢かもしれないが経験した，と思っている青年がその恐怖に怯えながら今度は本当に死んでいくというものである。勿論 Francis や Peter とは異ってこの青年は30才をすぎているので，

自分の少年の頃の経験として友人に語るという時間的な距離はあるけれども，彼が死であると意識している内容には Francis のそれと良く似た点がある。それは次の引用に示されているように自分がたったひとりで誰かにとり囲まれているという点である。

> I thought that I'd been bead. It wasn't like sleep at all. Or rest in peace. There was someone there, all round me, who knew everything. Every girl I'd ever had. Even that young one who hadn't understood. —— abridged —— Even the money I'd taken from mother. I don't call that stealing. It's in the family. I never had a chance to explain. Even the thoughts I'd had. A man can't help his thoughts.

これは自分の力ではどうすることもできない状況であり，自分の行動の弁明もできずただ耐えねばならないこととして設定されている。そしてさらに次の引用でも明らかであるように，その状況を意識している自分は永久に変化しないのである。

> And I saw what was coming to me too. I can't bear being hurt. It wasn't fair. And I wanted to faint and I couldn't, because I was dead.

ここにみられる自分をとり囲んでこれから起ころうとする状況に対する覚めた自己認識は Francis の耳をすまして足音に耐えねばならない恐怖と似ており，さらに同じく孤立無援の淋しさと永久に続く絶対絶命の絶望を読みとることができるようである。ただ Francis と異っている点は青年をとりまいている＜someone＞が彼のそれまでの行為さらには心の中で思ったことまで全て知っていることである。そしてそれに対して＜I never had a chance to explain ＞というように弁解する機会は与えられていないのである。永久に生前犯した彼の行為と行為には到らなかった思いを彼は意識させられ続けているのである。気絶して無意識になってそれを忘れようにも＜when one's dead there's no unconsciousness any more for ever＞だというのである。

この罪意識に責められ，問われつづけるという点は Francis の恐怖にはないことである。Francis には永久に罪意識に責められる絶望という明確な意識を認めることはできないが，何かに取りまかれ追いつめよれていく，そしてそこから逃れられないという絶望は彼の場合にも認めることができると思われる。では＜the gentle lapping of strange footsteps＞は一体何を表わしているのであろうか。*The Second Death* とあわせて考えるならば，＜someone＞つまり人間の生のすべてを全知している者，そしてその過去を明らかにして人間に意識させる者，即ち罪の告発者が接近してくる足音と考えることができるのではないだろうか。しかし Francis の恐怖はまだそのようなことを意識する以前の，人間の生には必らず変化という終りのときのあることを，そしてその終りとは何かしら恐ろしい暗黒の世界に接近する不可解な足音に耐えてただひとり在らねばならぬときであることを識る者の恐怖であると考えることができると思われる。

III

生が終りに到ることの恐怖を識る者としての Francis と他の登場人物との関係を次に考察してみたい。登場人物のそれぞれの役割と意味を知ることは，さらに Francis の理解に役立つと思われるからである。ここではまず母親，二人の女の子及びパーティに集まる子供達，そして Mrs. Henne-Falcon を取り上げてみたい。（Peter は次章で扱うことにする）

一般的に云って母親と子供という関係は家庭という安住の場を作り，この世で一番密接な関係を保ち，母親は子供の第一の理解者であり，最高の愛情と庇護を与える者であろう。しかし Francis の母親は次の引用が示すように風邪をひいたという嘘までついてパーティへ行くことを避けようとする Francis の本心を全く理解していないのである。

> when at breakfast his mother said, "I hear you have a cold, Francis," he made light of it. "We should have heard more

> about it," his mother said with irony, "if there was not a party this evening," and Francis smiled uneasily, amazed and daunted by her ignorance of him.

このように Francis の本当の気持を全然知らず彼を驚ろかせ，怖けさせる母親はまた Francis にとって，おとなの知恵とその偽りにみちた生活の知恵をかざして生きる存在でもある。それは夕方になってパーティへ出かける時が近づき，仕度を整えて玄関に立つ Francis の心理に表わされている。今にも＜ I don't go. I'm afraid of the dark ＞と叫んで家の中に駆け込みたい衝動にかられながら，追いつめられた Francis がする自問自答の一部が次の引用である。

> He would answer : "You can say I'm ill. I won't go. I'm afraid of the dark." And his mother : "Don't be silly. You know there's nothing to be afraid of in the dark." But he knew the falsity of that reasoning ; he knew how they taught also that there was nothing to fear in death, and how fearfully they avoided the idea of it.

Francis はおとなが子供に教える＜暗闇に恐ろしいことなんか何もないのよ。死ぬことなんかちっともこわくないのよ＞ということばが偽りであることを知り，＜そういう考えを恐れてさけている＞とおとなのつまり母親のごまかしを察知しているのである。だから次の引用が明らかにするように，母親に何もかも話して二人の関係を回復するということができないのである。

> he couldn't bring himself to lay bare his last secrets and end reserve between his mother and himself

母親にぎりぎりの秘密を打ち明けることができない Francis はパーティの主催者である Mrs. Henne-Falcon に最後の望みをかけて玄関を出てゆくのである。明るいホールや家の中，両親のための食器を並べるなつかしい物音を背後にして，とっぷ

り暮れた冬の夕方の寒さの中へ，乳母の持つ懐中電灯に導びかれて，心を決めて出かけてゆくこの場面には，母親の偽りを見ぬき，関係を回復することを絶って出かけてゆく Francis が描かれている。つまり家庭に対する望みを捨てて，断絶したところで生きようとする孤独な人の後姿を読みとることもできるようである。

次に Joyce と Mabel Warren という年上の少女達と Francis の関係を考えるならば＜Their sex humiliated him＞ということばで代表されるようである。Francis は去年のパーティで隠れん坊の折り，暗闇で急に Mabel Warren に腕をさわられて悲鳴をあげたこともあって，他の子供のようにスマートにゲームの出来ない彼は＜under lowered scornful lids＞という眼つきで彼を見つめている彼女達が苦手である。おさげ髪を＜swung superciliously to a masculine stride＞させて，Warren の家へ向う Joyce は乳母と散歩する Francis とは異って，たったひとりで人通りのない道をこれみよがしに出かけている。すべて Francis に屈辱を感じさせる存在である。このように Francisは自尊心が傷つけられ，さらに他の子供達と同様に彼女達に立ち向うことができず，＜he could stand alone in corners as far removed as possible from Mabel Warren's scornful gaze＞というようにできるだけ彼女達との交渉を避けるのである。ここには異性と対等に交われず，そのことによって自己の生を充分に楽しんで生きることのできない者の姿を読みとることができると思われる。

またパーティに集っている子供達からみると Francis は次の引用にあるように高慢な嫌な子供である。

> All that he could say now, still in the precise tone which other children hated, thinking it a symbol of conceit, was, "I think I had better not play." He stood motionless, retaining, though afraid, unmoved features.

この場面は Francis が恐怖による心の乱れを押し殺して， Mrs. Henne-Falcon に隠れん坊を自分はしないほうがいいと最後の希望をかけて話しているところである

が，顔の表情も変えず，声の調子も乱さず話す，いわば子供らしくない Francis は他の子供からみれば，気取って高慢な仲間に入れたくないような子供である。そして実は Francis が本当は暗闇が怖わくて隠れん坊をしたくないのだとわかったとき，<弱虫>とはやしたてる子供達は次のように描出されている。

> Six children began to sing, "Cowardy cowardy custard, " turning torturing faces with the vacancy of wide sunflowers towards Francis Morton.

ここに描かれている< the vacancy of wide sunflowers >とは何を表わしているのだろうか。上述してきたように，Francis を暗闇の恐怖を識り，またその奥にひそむ死ということがらを敏感に察知した者，即ち自己という存在に目覚めた者であるとするならば，夏の太陽に向ってたくましく咲き続けるひまわりのうつろさとは，まだ心が空白で死に占領されていないことを表わしていると考えられるのではないだろうか。それは無意識，つまりひとりの人間として自己に目覚めていないことを表わしてると考えられる。隠れん坊の愉しみに心奪われて，胸の豊かな Mrs. Henne-Falcon に向って質問や提案を< pecking at >する子供達のひな< a flock of chickens >のイメージと共に，このひまわりの空虚さは自己を認識する以前の人間の生物的無意識状態の symbol ではないかと思われる。

この点については Mrs. Henne-Falcon に関する描写も同様である。その名前からも暗示されているように，彼女と子供達の間にはめんどりとひなの関係が浮び上ってくる。< if hide and seek had been inserted in Mrs. Henne-Falcon's programme, nothing which he would say could avert it. >というようにパーティの運営に絶対的な力をもち，子供達を<whirled them into her set programme of entertainment>する彼女に，ひなを自分の勢力範囲にとじ込めて，思うがままにすることが自分の役目であり，愛情であるとする母どりの姿を見ることができるのである。Francis の思いあまった末の<it will be no use my playing. My nurse will be calling for me very soon. >という切実なことばに対しては<absent-mindedly >にしか返事をしない目前の務めに心奪われた，大きくて<her exuberant breasts

>という生命力に溢れたMrs. Henne-Falcon である。彼女に向う Francis の姿は次のように描かれている。

> he advanced steadily across the hall, very small, towards her enormous bulk. —abridged— With his strained face lifted towards the curve of her breasts, and his polite set speech, he was like an old withered man.

ここには生の豊かさに溢れている彼女の姿と対照的に，しわだらけの老人という Francis の姿がある。彼女の生の肯定と享受に対して，Francis は死を身近に自分に関する事柄として見つめざるを得ない顔をこわばらせた老人として描かれているのである。

このように考えてくると家庭と断絶し，異性からも仲間からも離れたところに在って，自分の生の限界を見つめ，その恐怖に耐えている老人の姿によって，無自覚な生を生きている人々のなかで，生とその否定としての限界に目覚めている者のその恐怖による苦悩を Francis に見出すことができると思われるのである。

Ⅳ

Francis の双生児の兄である Peter は，このような周囲に対して部外者である Francis の唯一の保護者として設定されていると考えられる。さらに彼は Francis の心の不安や苦しみの理解者，共鳴者であって，相手に対する鏡としてその心的内容の体現者として設定されているようである。

まず保護者としてのPeter は次の引用にも示されているように，何分か先に生れた兄としての自覚にもとづいている。

> he was the elder, by a matter of minutes, and that brief extra interval of light, while his brother still struggled in pain and darkness,had given him self-reliance and an instinct of protection towards the other who was afraid of so many things.

ここに示されている非常に多くのものを怖れる Francis への＜an instinct of protection＞は Peter の Francis への愛情の表われと解することができるし，またこの物語のプロットを押し進める力ともなっている。例えば Francis がパーティに出かけたくないため，＜It will be a bad cold if I go to the party. Perhaps I shall die.＞というと兄らしい口調で Peter はきっぱりと＜Then you mustn't go＞と云い切って Francis を安心させるのである。そして乳母に Francis は風邪をひいたと告げてやるのである。この場面を初めとして全部不成功に終っているけれども，パーティでも隠れん坊をしないでもすむように試みるのである。隠れん坊が今年も余興のプログラムの中に入っていることを知った Peter は＜don't lets. We play that every year.＞と中止を提案したり，お菓子のおかわりをしたり，お茶をわざとゆっくり啜って少しでもその時間が来るのを遅らせようともするのである。或は下記の引用文中の＜as he had expected＞とか＜He must have prayed desperately＞という言葉が示すように，Francis はパーティの最初からこの瞬間を怖れ続けていたにちがいなく，今や捨てばちになっているにちがいないと案ずる Peter には Francis に対する理解と思いやりが溢れているのである。

> Peter watched his brother and saw, as he had expected, the lips tighten. Francis, he knew, had feared this moment from the beginning of the party, had tried to meet it with courage and had abandoned the attempt. He must have prayed desperately for cunning to evade the game,

Peter は上述の保護者としての立場をとりながら同時に双生児であるため，Francis と理解しあうために何の手段も不必要＜Between the twins there could be no jargon of telepathy＞であると設定されている。Peter は Francis とは独立した存在でありながら，同時にその介在物なしの直接的な相互理解のために，Francisの共鳴者，彼の内的苦悩と不安をうつし出す鏡のような体現者としても描かれているのである。冒頭 Francis が死の夢にうなされるのを見ていて，Peter は次のような不吉な鳥のイメージに襲われている。

> To Peter Morton the whole room seemed suddenly to darken, and he had the impression of a great bird swooping.

このような Francis の心理の Peter への反映は， Francis の恐怖が高まるにつれてしだいに現われてくる。いよいよ隠れん坊がこれから始るという瞬間に Peter が Francis の表情に認めるのも同様の大きな鳥の姿である。それは次のように描かれている。

> and again, the reflection of an image in another's mind, he saw a great bird darken his brother's face with its wings.

この大きな鳥のイメージは Peter に感知された Francis の恐怖の象徴であろう。さらにII章においてすでに述べた Francis の孤島の暗闇にひとりでとり残されるという恐怖のイメージも同じく Peter の心に映し出されたものである。それは次の引用が示すとうりである。

> But the knowledge of his terror, or the reflection of the terror itself, reached his brother's brain. For the moment, Peter Morton could have cried aloud with the fear of bright lights going out,

それは Peter 自身も危く声をあげそうになるくらい，その恐ろしさと不安は彼自らの心理となっている。さらに例をあげるならば隠れん坊の最中，暗闇にうづくまっている Francis の側に近づいて，Francis の手を握った Peter が経験する Francis の激情の動きというものは，下記引用文中の＜the regularity of a heart-beat＞ということばが表わしているように，Francis の恐怖に高なる鼓動であるのか，Peter のそれであるのか区別できにくいのである。事実はこのとき Francis の心臓はすでに停止しているかもしれないのであるけれども。

> He could experience the whole progress of his brother's emotion, from the leap of panic at the unexpected contact to the steady pulse of fear, which now went on and on with the regularity of a heart-beat.

このように Peter と Francis は双生児という機能を充分利用した密着した関係にあるということができよう。

しかしながら Peter と Francis を区別する点も認められるのである。それは恐怖や不安に対する Peter の意識に表われていると考えられる。Peter の心は鏡のように Francis の恐怖の様をまざまざと映し出すのであるが，次の瞬間彼はそれを自分のことがらではなく Francis のことがらとして識ることができる者として設定されているのである。例えば次の引用文にもそれが表われている。

> For the moment, Peter Morton could have cried aloud with the fear of bright lights going out, —abridged— Then he remembered that the fear was not his own, but his brother's.

そしてまた Francis にとっては恐怖以外の何物でもない暗闇は Peter にとっては＜The dark to him was only an absence of light＞という単なる事実である。Francis にとっては孤立と絶望を内包する暗闇が Peter にとっては明りのない状態という物理的状態でしかないのである。仮りに不安におそわれても＜There's nothing to fear in the dark＞というおとなのことばで自らを励し，＜self-reliance＞のできる存在である。同じおとなのことばを Francis が偽りであると判断したのに対し，Peter はそのことばによって励まされているのである。だから Francis には＜a burning panic, admitting no ideas except those which added to the flame＞という恐怖をもたらす＜行くよ＞という鬼になった子供の声は，Peter には理性を損うようなものではなく，＜an altruistic emotion＞という Francis をひたすら気づかう愛情をかきたてるだけである。

このようにみてくると，Francis が死んだという事実もさることながら，＜the full paradox ＞を幼ないので理解できないという Peter にはどのような意味が与えられているのであろうか。

＜the full paradox ＞の内容は表面的には Francis の唯一の理解者，共鳴者であり保護者である Peter の愛情にもとづいた行動であるところの，暗闇の中の Francis

へ接近して手を伸ばして Francis の顔を探り出したことと，彼等の＜the most intimate communion＞である手を握ってやるという行為が，実は Francis を恐怖の絶頂へと追いやり，死に到らしめることになった，ということである。他者への愛情がその全く逆の他者を殺すという結果に終ったという人間の愛の不完全さが full paradox になっていると思われるのである。が別の面からみるならば，それはまた人間が何かを理解したり，識ったりすることに伴う paradox を表わしているとも考えられる。つまり Peter は＜watching Francis's troubled face with pity and an imperfect understanding ＞ということばが示すように，Francis に対する理解と愛情に満ちていながら，実はその理解には本質的に欠けたところがあるのである。Francis が暗闇の奥に死という孤絶を感じとるという内発的理解のために＜There's nothing to fear in the dark＞というおとなのことばが納得できなかったのに対して，Peter にとっては同じことばが暗闇についての彼の理解となっており，自らの内部の恐怖を Francisのものであると外発的に理解することによって，Francis の恐怖の底にある本当の意味を全く理解できなかったのであ。Francis が死んだのにどうして＜the pulse of his brother's fear＞が続くのだろうという Peter の疑問は Francis についての，そして彼自身についての理解が不完全なものであったことを表わし，したがって今までの一切の事柄が逆転して Peter 自身のことがらになる可能性をも暗示していると思われる。この点については次に引用したところにも象徴的に表わされていると考えられる。

> To address Peter was to speak to his own image in a mirror, an image a little altered by a flaw in the glass, so as to throw back less a likeness of what he was than of what he wished to be.

ひびという欠陥の故に Francis のそのままの姿ではなく Francisの理想像をうつす Peterという鏡は逆に Peter の不完全さを暗示していると理解することもできるのではないだろうか。

次に問題になることは Peter が上述のような意味があると思われる＜the full paradox＞をまだ理解できない子供として設定されていることである。つまり彼は

Francis の死という事件を経験することによって何かに目覚め，新しいことを識るという完全な開眼をするに到っていないのである。<an obscure self-pity>を感じながら，Fransisは最早恐怖も暗闇もない世界にいるのにどうしてこんなに<the pulse of his brother's fear> がどっくどっくと続くのだろうと訝しく思っているだけなのである。そこには事柄の真相を識り得ないで途方にくれている、しかし同時におぼろげに自分が憐みの対象となるような存在であることを自分で識りかかっている Peter の姿がある。

このように考えてくるとこの作品のテーマは Francis によって表わされている生の疎外者と，Peter によって表わされている同情者，共鳴者との交流によって明らかになる人間の不完全さであり、それによって生ずる人間の関係の皮肉さであるということができるのではないだろうか。つまり Peter の Francis に対する愛情という人間のモラルの背後に潜んでいる人間の不完全さのもたらす悲劇である。(5) これは換言すれば人生の日常性の背後を抉り生の実相を顕わにしようとすることでもある。このことを適格に表象できるのが，この Peter 或は Francis というまだ9才の人生経験に乏しい未完成な少年であったということはできないだろうか。

V

幼い子供の恐怖心という素材を借りて描き出された人間一般に共通するところの生というものが必然的にそなえている恐怖（死）はこの短篇と同年の作品であり，Greene の処女作となっている *The Man Within* における死の扱いと比較してみると趣きが異っているように思われる。主人公 Andrews は死を自己変革の手段として，つまり自己確立のための肯定されるべき一つの手段として受けとめていた。その死は人間の生の否定となるのではなく，生の延長線上に位置づけられる，いわば死が逆に Andrews の真の生の確立を約束するものとして暗示されていたと思う。(6) この点 Francis を生の疎外者たらしめた死とは相違している。(7) このことは死に二面を見い出すことができると考えられる。一面は人間を生かす死，他面は人間を疎外する死であって，前者は人間の変貌を暗示する死へ，後者は人間の生に内在する生を否定するもの（罪）を暗示する死へと変化していくものではないだろうか。このことは Greene

の後の作品を解し，さらに彼の作家としての本質を理解するのに興味あるまた重大な鍵であろうと思われる。ともあれ作家としての第一歩を踏み出したとき，すでに死を内包する生を描いたということは一つの特徴であって，後の有名な essay[8] の＜the moment when life took a new slant in its journey towards death＞や＜surely we choose our death much as we choose our job＞という，死の前提なしには生が語られないことばを待つまでもないことである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

註1　元田脩一：短篇小説の分析と技巧，開文社，昭41. p.16

註2　同　上

註3　同　上　p. 88

註4　Carolyn D. Scott も Francis を死を識る者としている。さらに *The Hint of an Explanation* に示されている＜a Thing＞悪の力を識る者として予知されるようであるとも述べている。
Carolyn D. Scott：*The Witch at the Corner*：*Notes on Graham Greene's Mythology* ——— *Graham Greene*, edited by Robert O. Evans, University of Kentucky Press, 1963, p. 233　p. 239

註5　John Atkins はこの作品の主題は幼年時代の恐怖であるとする。
John Atkins：*Graham Greene*, Calder and Boyars, London, 1957, p. 23

註6　拙論 *The Man Within* 論，英文学研究第6号，梅光女学院大学，昭45　参照

註7　この点について John Atkins は Francis の恐怖はそれまでの詩に表われた deathwish にくらべると，新しいまた攪乱する特徴であると述べている。
註5に同じ。

註8　*The Lost Childhood*, 1951.